

青年には読書が似合う

図書館長 木幡 文徳

唐突な話だが、私は、読む側の読者と読まれる側の本の間には「旬」の関係というものがあると考えている。つまり、人にはその年頃に似合った、その成長に合わせて読んでおくべき本があり、逆にその年頃の読書の機会を逃せば年齢が進んだ時期にはもはや読むことは難しくなる本があるということである。

ここにいう読書というのは、いわゆる専門にかかわる情報を取得する作業以外で本を読むことを意味し、極めて広い意味での読書を指す。一般には、社会人としてあるいは職業人としての生活が深まるにつれて、専門領域の情報の取得そして活動に追われ、一般的にはそれ以外の領域の本を読むことは少なくなっていくのが通常であろう。さらには、偏見・軽薄のそりを免れないことを承知で言えば、もはや年齢的に進んだ身にとっては、今更、そのような本にアクセスするというのは、格好悪いと思われる本もあるからである。私は、もはや老人の域に達しているのだが、自分の貧弱な読書歴に照らしても、今即座に思い浮かぶものの一部を挙げれば、例えば、倉田百三『愛と認識との出発』『出家とその弟子』、ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』『知と愛』、アンドレ・ジイド『狭き門』、『ギリシャ・ローマ神話』の類、などは、あの時、専修大学の学生となって間もなくの時期に読んでおいてよかったと思うばかりで、反面、大人といわれる年齢の人が、専門的研究のためならいざ知らず、これらの類の書物を手にしているのを想像するとやや似つかわしくないとの感覚を否めないのである。

青年期は(日本においてはその時期は大学生の時期とほぼ重なるのだが)、社会人となって様々な問題に対処し人生を生き抜いていくために必要な基礎的知力、いわゆる教養をはぐくむ時期であるとの概ねの理解があると思われる。そこで、青年は、どのような書物を手にしていようと格好が良いには良いのだが、より「旬」の関係にある読書をすることは、より「様にもなり」さらには実質的意義もあるといえるのではあるまいか。これは、その時期を過ぎた者からすればうらやましい限りで、青年期に読むべき本に不幸にして接する機会を失ったとすると、後にそれにアクセスするのはかなり抵抗を感じることになるのである。

どうか、皆さんには期を逸することなく青年の特権を享受されこの「格好よさ」を満喫されることを願うものである。